

様々な食品等について販売数の増加につながる気温を見出しました
～スーパーマーケット及びコンビニエンスストア分野における
気候リスク評価に関する調査報告書の公表～

気象庁では、新たな気象ビジネス市場の創出を通じた社会の生産性向上を目指しており、季節予報をはじめとする気候情報についても、より多くの産業分野で有効に活用していただくための取組を行っています。この取組のひとつとして、様々な産業分野における猛暑や寒波などによる悪い影響の軽減もしくは良い影響の利用に向けた対策（気候リスク管理）のため、2週目の気温の予測情報などの気候情報の利用技術の普及を進めています。

今般、この取組の一環としてスーパーマーケット及びコンビニエンスストア分野を対象とした気候リスク管理のため、食品・飲料・雑貨類の46品目の販売データと気温、降水との関係を地域ごとに分析調査しました。その結果、主に以下のことが明らかになりました。

1. 販売数と気温、降水量との間に関連がある品目が多数ある。
2. 販売数が急増する気温といった気象条件を客観的に推定可能である。
3. 販売数と気温の関係は地域ごとに特徴が異なる場合がある（スポーツドリンクの販売数が急増する気温は、福岡と札幌で異なる、など）。

本調査結果を活用した気候リスク管理の例は別紙をご参照ください。また、調査報告書及び調査の概要と活用例は、気象庁ホームページの気候リスク管理解説サイト内の下記ページに掲載しています。

（調査報告書） http://www.data.jma.go.jp/gmd/risk/pos_chousa.html

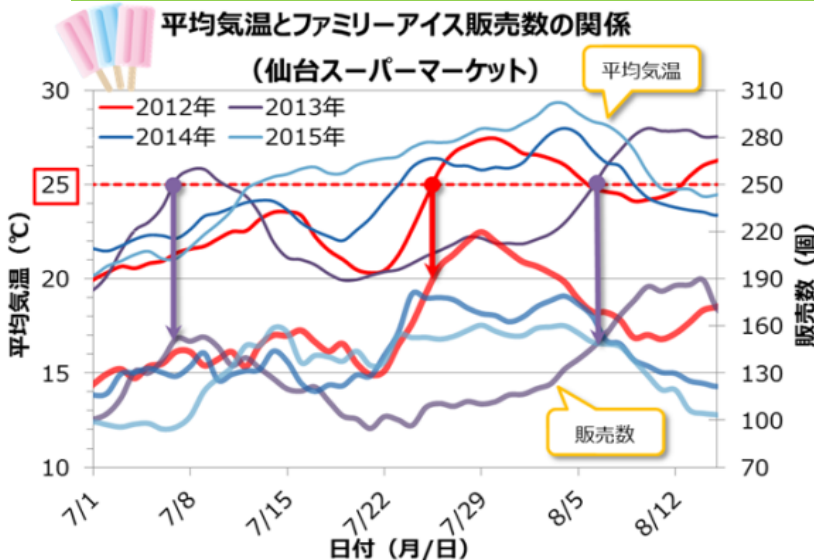
（概要と活用例） http://www.data.jma.go.jp/gmd/risk/taio_pos.html

今後も、気候リスク管理解説サイト(<http://www.data.jma.go.jp/gmd/risk/>)を充実させ、各種産業分野における気候リスク管理のための気候情報の利活用促進に取り組んでいきます。

（問い合わせ先）気象庁地球環境・海洋部気候情報課
電話 03-3212-8341（内線 4145）

- ① ファミリーアイスの販売数が多くなるのは平均気温が25℃を超える頃
- ② 気温予測情報を活用することで発注量の調整といった早めの対策が可能に
⇒販売数と気象条件との関係を定量的に調査し、気温予測情報と組み合わせることで、気候リスクへの対応を計画的に行うことが可能となります。

①気候リスクの評価(販売数と気温の関係)



7日間平均の平均気温とファミリーアイス※¹の販売数の時系列図(図1)をみると、2012年(赤色線グラフ)の7月下旬や、2013年の7・8月上旬(紫色線グラフ)など、各年とも平均気温が25℃を超える頃に販売数が多くなることが分かります。

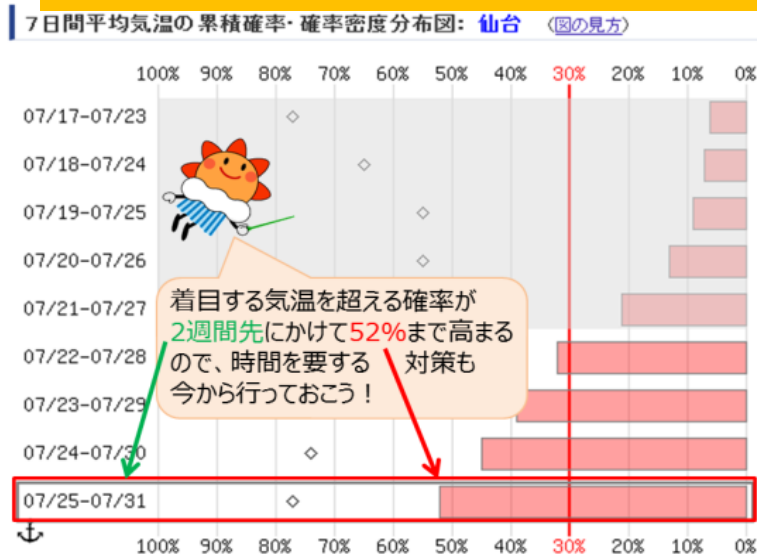
ファミリーアイスの販売数のほか、冷やし中華やスポーツドリンク等、気温や降水との間に関連がある品目は多数あります。

また、販売と気温の関係は地域ごとに特徴が異なる場合があります。

図1 仙台のスーパーマーケットにおける7日間平均の平均気温とファミリーアイスの販売数の時系列図(7月1日～8月15日)
細線は平均気温、太線は販売数を示し、各色が年に対応する。
赤色点線は基準温度25℃を示す。
(※1)ファミリーアイスとは、内容量300ml以上のもの(但し、内容量は300ml未満で個包装3個以上のものを含む)のことをいう。

ファミリーアイスの販売数が多くなる平均気温25℃に着目

②気候リスクへの対応(気温予測情報の活用)



2012年7月17日当時の2週間先までの気温の確率予測資料※²(図2)では、特に2週目(図1の赤矢印の頃にあたる7月25日～31日)の7日間平均気温が25℃を超過する確率は52%と高くなっていました。

この予測をもとに、2週目にかけてファミリーアイスの販売数が急増する可能性が高いと判断できることから、小売店においては発注量の調整や販売促進策の実施等の事業活動を事前に適切に行うことが可能となります。

図2 2012年7月17日発表の仙台における2週間先までの確率時系列図
2週間先までの期間について、注目する7日間平均気温25℃を超過する確率の推移を示す。縦軸は7日間平均の期間を、横軸は注目する7日間平均気温25℃を超過する確率を示す。

(※2)確率予測資料 URL:
http://www.data.jma.go.jp/gmd/risk/probability/guidance/index_w2.php